

金持ちと鶏

小川未明

青空文庫

あるところに金持ちがありまして、毎日退屈なものですから、鶏でも飼って、新鮮な卵を産まして食べようと思いました。

鳥屋へいつて、よく卵を産む鶏を欲しいのだが、あるか、と聞きました。

鳥屋の主人は、

「よく卵を産む鶏なら、そこのかごの中に入っていますのより、たくさん産む鶏はありません。」といいました。

金持ちは、かごの中に入っている鶏を見ました。それは、背の低い、ごま色の二羽の雌鶏と、一羽のあまり品のよくない雄鶏でありました。

「これがそんなに卵を産むのか。」と、金持ちは問い返しました。

「産むにも、それほど産む鶏は、おそらくありません。」と、鳥屋の主人は答えました。金持ちは、その三羽の鶏を買って家に帰りました。

なるほど、日数がたつにつれて、雌鳥は毎日卵を産みはじめました。一日とて休みなく産んだのであります。金持ちは、毎日新鮮な卵を食べられるので喜びました。

「買う時分には高いと思つたが、こう、毎日卵を産むんでは、ほんとうに安いものであ

つた。こんないい鶏というものは、めつたにあるもんでない。」と、独りで自慢をしてみました。

ある日のことであります。金持ちの友だちが遊びにきました。金持ちは友だちに向かつて、

「家の鶏は、ほんとうに珍しい鶏で、毎日いい卵を産む。まあ、あんな鶏はめつたにな
いものだ。」と、自分の鶏をたいそうほめていいました。

友だちは、日ごろから、やはり鶏が好きであつたものですから、

「ほう、おまえさんも、このごろは鶏を飼いはじめなされたか。どれ、どれ、どんな鶏だ
かひとつ見せてもらおう。」といつて、さつそく、裏に出て、その鳥をなめました。

金持ちは、そのそばにやってきて、

「どうだい、珍しい鶏だろう。」といいました。

友だちは、黙つて、その鶏を見ていましたが、やがて大きな口を開けて笑い出しました。

「おまえさんは、まだ鶏にはまつたくの盲目じゃ、この鶏などは、さらに世間にある鶏で、
珍しい鶏でもなんでもない。」といいました。

それから、友だちは、自分の養鶏によつて経験をした、いろいろなことを語つて金

持ちかねもに聞かせましたので、金持かねもちは、自慢じまんしたのが恥はずかしくなりました。

友ともだちが、帰かえりました後あとで、金持かねもちは、なんだか悔くやしくなりました。日ひごろから負まけずぎらいな男おとこでありましたから、どうかして、そのうち友ともだちを驚おどろかしてやりたいものだと思おもいました。

いままでのように、金持かねもちは、卵たまごを産うむ鶏とりをたいせつにしなくなりました。どうかして、こんなありふれた鶏とりをどこかへやって、珍めずらしい鶏とりをほしいものだと思おもいました。

ある日ひのこと、金持かねもちはふたたび町まちの鳥屋とりやにやってきました。

「鳥屋とりやさん、どうか私わたしに珍めずらしい鶏とりを売うつてくれないか。この前まえ、この店みせで買かって帰かえった鶏とりはありふれた鶏とりで、珍めずらしくもなるともない。」といいました。

すると、鳥屋とりやの主人しゅじんは、

「この前まえいらしたときには、卵たまごをたくさん産うむ鶏とりが欲ほしいとの仰おほせでしたから、卵たまごを産うむ鶏とりをさしあげたのです。いかがですか、卵たまごを産うみましたか。」と聞ききました。すると、金持かねもちは顔かおをしかめて、

「産うむにもなんにも、毎まい日にちうるさいほど産うむ。卵たまごばかり食くっていられるもんでなし。」と、かえって不平ふへいをいいましたので、さすがの鳥屋とりやの主人しゅじんもたまげてしまいました。

「よろしゅうございます。その金網を張ったかごの中なかにいる鶏とりは珍しい鶏とりです。おそらく、こんな鶏とりをこの近きんざい在ざいに持もっている人ひとはありません。強いことつよはこのうえなしです。かごから外そとに出だすときは、脚あしになわをつけておかないと、空そらを飛とんで、逃にげてゆきます。これは対馬つしまからきましたので、野生やせいの鶏とりでございます。」といいました。

金持ちかねもは話はなしを聞きいただけで、はやびつくりしました。そして、金網かねあみを張はったかごの中なかをのぞきますと、なるほど、首くびの長ながくて赤あかい、背せの高たかい、けづめの鋭すずととがった雄鶏おんどりと、一羽わのそれよりやや体からだの小ちひさい雌鶏めんどりがいました。

「鳥屋とりやさん、ほんとうに珍しい鶏とりだね。」と、金持ちかねもは喜よろこびに喜よろこびながら問といました。友ともだちに見みせて、ひとつ驚おどろかしてやろうと思おもったからです。

「へい、へい、お珍しいといふことにかけては、どこへ出だしたって恥はずかしいことはありません。」と、鳥屋とりやの主しゅじん人は答こたえました。

金持ちかねもは、この鶏とりをかごと買かって帰かえりました。明あくる日ひ、さっそく、友ともだちのもとへ使つかいをやつて、世よに珍めずらしい鶏とりを手てに入いれたから、ぜひ、見みにきてくれと告つげました。

鶏とり好きずの友ともだちは、どんな鶏とりを金持ちかねもが買かったろうと思おもって、すぐによつてきました。「珍しい鶏めずらをお求もとめなされたというが、どれひとつ見みせていただこう。」と、友ともだちは、

金網かなあみを張はつたかこの前まえに立たつて、内うちをのぞきました。

「なるほど、変かわつた鶏とりだな。」と、感嘆かんとんをしてながめていました。

そばに立たつていた金持かねもちは、得意とくいの顔かおつきをして鼻はなをうごめかしていました。

「この鶏とりは、空そらを飛とぶばかりでなく、強つよくてどんな鶏とりにもけつして負まけたことがない。」

と、金持かねもちがいました。

友ともだちは、金持かねもちの顔かおを見上みあげて、

「空そらを飛とぶとな、そんな鶏とりが世よの中なかにありますかえ、それはすこしおおげすぎはしない

か。」と、頭かしらをかしげました。

「だれがうそをいうもんか。ひとつ飛とばしてみせよう。」

と、金持かねもちはいつて、大騒おおさわぎをして、鶏とりの脚あしに繩なわを結むすび付つけて、外そとに出だして放はなしました。

すると、たちまち羽はばたきをして、鶏とりは屋根やねの上うへを飛とび、木きの枝えだに止とまりました。

友ともだちは、これを見みて呆氣あっけにとられると、金持かねもちはますます得意とくいになつて、

「このとおりだ。鬪とうけい鶏けいをさせるなら、どこからでも相手あいてになるのを連つれてくるがいい、

けつして、この鶏とりは負まけないから。」

と、金持かねもちはいました。

友だちは、考えていましたが、
「じつは、私のところに強い闘鶏が一羽いる。かつて負けたことがないのだから、ひとつおまえさんのこの鶏と闘わしてみましよう。」
といました。

「それはおもしろいことだ。」と、金持ちは答えました。

明るる日、友だちは闘鶏をつれてきました。そして、金持ちの鶏と闘わしました。

はじめのうちはどちらが勝つか、負けるかわからないほどでありましたが、ついに金持ちの鶏に友だちの闘鶏は負かされて、血だらけになってたおれてしまいました。

それからというもの、金持ちの得意は一通りでありませんでした。近所でも、この鶏は評判になりました。

小学校の生徒や、小さな犬は、この鶏をおそれてそばに寄りつきませんでした。

金持ちは、鶏が家に慣れると、つねにかごから外に放しておきました。夜になると鶏は、家に帰ってきてかごの中に入りました。

近所の人々は、鶏のために圃や、庭を荒らされるのを苦に思いましたけれど、家や、地所が金持ちの所有であるために、なにもいわずに忍んでいました。

秋あきの日ひのこと、この村むらを洋服ようふくを着きて、銃じゅうを肩かたにした男おとこが、獵りよう犬けんをつれて通りまし
た。日ひごろ怖おそろしいもの知らずの金持かねもちの鶏とりは、犬いぬに向むかって不意ふいに飛とびつきましたので、
犬いぬは怒おこりました。そうして、とうとう犬いぬのためにかみ殺ころされてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

初出：「子ども雑誌」

1919（大正8）年10月

※表題は底本では、「金持《かねも》ちと鶏《にわとり》」となっています。

※初出時の表題は「金持と鶏」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金持ちと鶏

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>